調　査　の　結　果

(1) 屋嘉田潟原の形状

本潟原は北西に面し，珊瑚裾礁によって外面水域と区別される。面積はおよそ230 haの海域である。この海域を東及び南東側から囲む陸側の山地は高さ400 mの恩納岳につらなる小山系をバックにしている。本潟原に流入する水量は生活下水を含めてもそれ程多くないと推定される（第3図）。一時的に降雨量の大きいときは酸性土壌の赤土が流入し，海浜に接する200～400 mの水域を赤く濁す状態がみられる。しかしながら底質の測定結果では粘土分の堆積は，川口附近で15％あり，大部分は6～7％である。このことは海水の動きが強いため逸散させられる結果であろう。したがって内湾性が弱いといえる。

本海域は水深5 m以上の水路とそれに続くBoat Channelによって大きく2つの部分に分けられる（第4図）。すなわち，Boat Channelより陸に向う部分は比較的内湾性が強く，砂礫帯，スガモ帯，さらに砂泥底と海浜部へつらなる。この部分はほとんど潮干帯である。Boat Channelより沖側は，そのChannelを含めて珊瑚帯を形成している。Channelはハマサンゴが主体をなし，Channelの外側から裾礁に至る部分は広大なacropora帯である。Boat Channelから外側一帯は，それより内側にくらべてより外海性が強いことがうかがえる。なお，Boat Channelに沿って夫々夫婦島，マンジ島，イオウ島，宜志富島が並び，それらは波浪の強弱の面からも内湾，外海性の差を強くしているものと考えられる。

本裾礁は，石垣島や久米島等にみられる裾礁と異なり，Reef flatの上面にもacroporaがみられる。これまで実測する機会が得られなかったがReef flatの高さは，およそ0米水位附近であると推測される。すなわち，この裾礁は春～夏の大潮時には一部露出するが，珊瑚帯は高さ1 m程の砂礫底からなり，その中に点々とpactch状にacroporaが群生している。

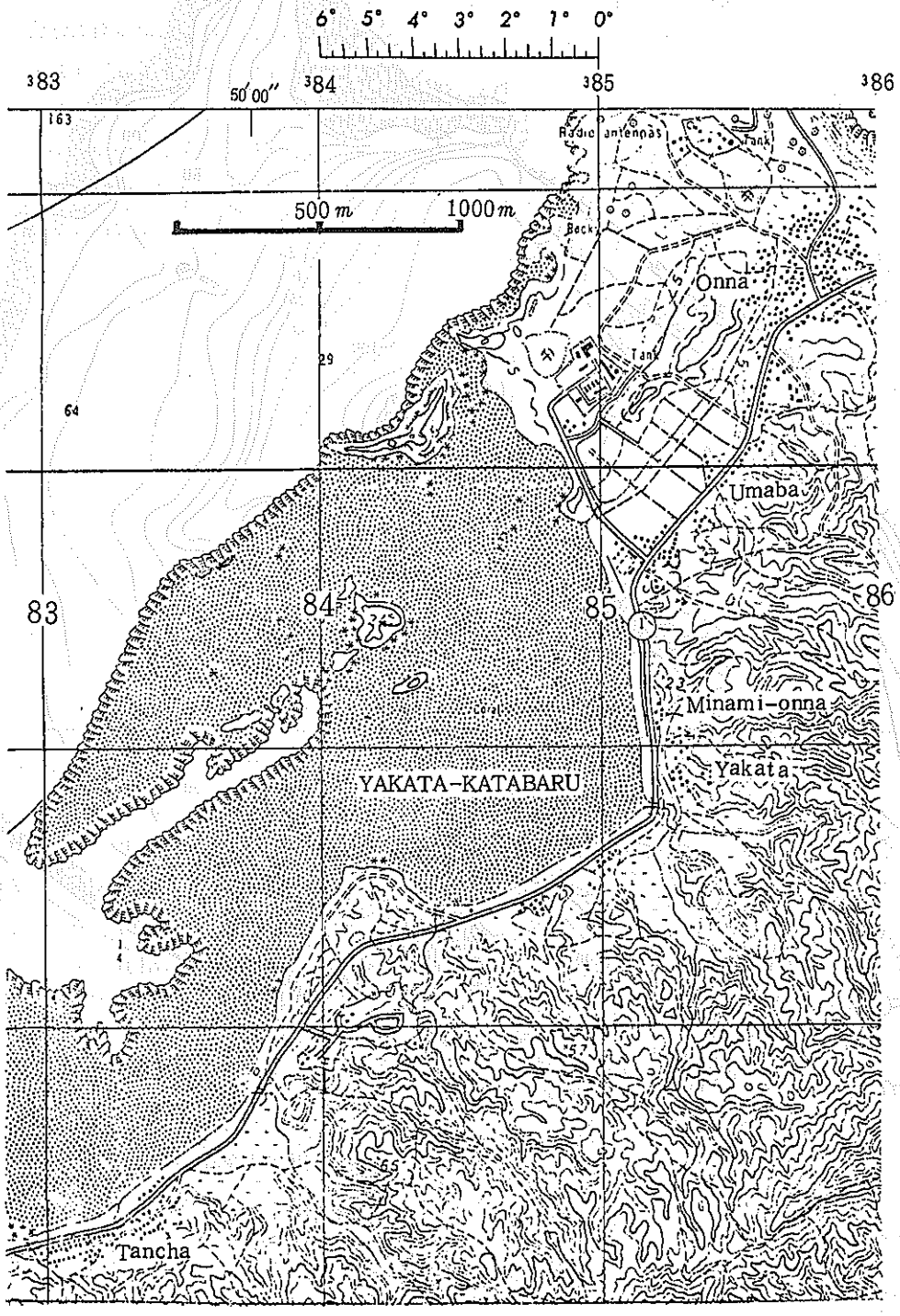
珊瑚帯の形状は（とくにReef flatの高さ，またlagoonについて）与論島の珊瑚礁に近い形を示しているものと思われる。

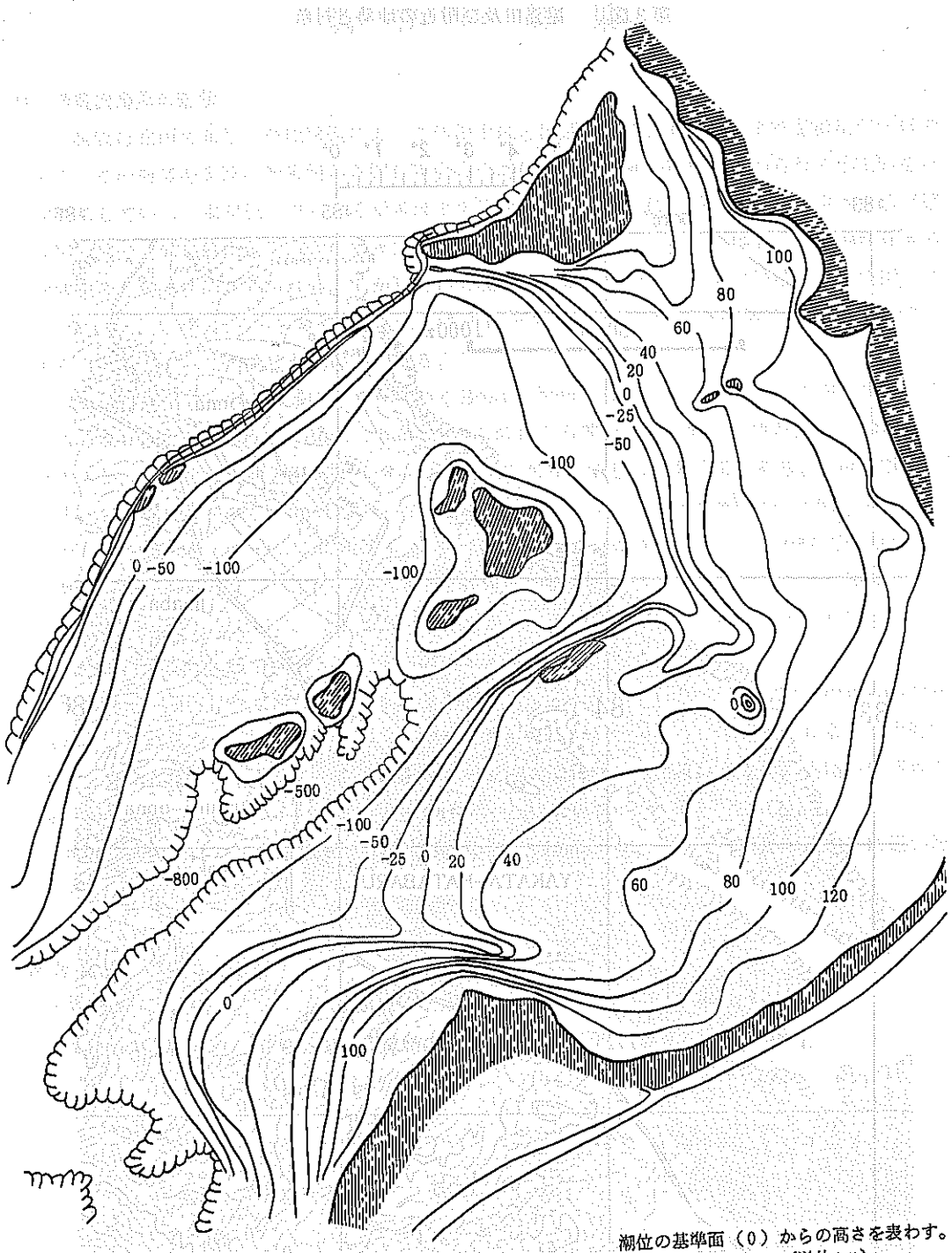
参考文献

平田国雄，大迫暢光，堤民人，与論島の珊瑚礁：Benthos Reserch № 3/4　1971

琉球列島米国民政府，工業用地及新都市調査，沖縄，1969

第３図　　屋嘉田及び附近の地勢と村落





潮位の基準面（0）からの高さを表わす。
(単位cm)

第4図　海底の地形図